

森本正一氏著

『自己変革に導く文学教育』

こししばらく話題を欠いていた文学教育界に、波紋を生ぜしめる一石が、広島地のより投ぜられた。本書がそれであり、著者は、「ひろしま文学教育研究会」の森本正一教授である。

広島市には、地味な研究活動をつづけていた「広島文学教育研究会」というサークルがあった。その会の主宰者、松永信一教授が逝去された後、その遺志をつぐぐべく、森本教授を中心に結成されたのが「ひろしま文学教育研究会」（昭和48年4月発足）である。本書は、この研究グループの最初の成果として問われたものであった。本書「実践編」では、この会の実践家が執筆に協力している。

しかし、あの難解をもつて知られる松永理論（言語表現理論）が、スムーズに文学教育の実践理論に授用、体系化されたとは思えない。かなりの苦勞がその課程にはあったはずである。そのあたりの事情は「あとがき」（安田平一氏）でこう述べられている。

「この会の主な研究内容は、松永先生のお考えを深化拡充させつつの教材解析と授業実践です。具体的に個々の教材に当たってみる時幾多の問題点が発生し、その度に森本先生

のご指導のもとに、体系を整えてきました。私どもの態度としては、本居宣長が学問の道として示した「師の説になじまず、師の求めたる所のものを求めよ」という考え方を根底に置きました。その結果、私どもの理論と方法論は拡充深化と体系整備の度を加え、森本先生の手による装い新たな理論構築とともに、会員一同の実践の裏付けによって、その厚みを保有するにいたったと思っております。」（二三八頁）

理論が先行し、実践的な肉付けがあとになった場合、その体系化への道は予想以上に険しいのがつねであるが、著者たちも例外ではなかったらしい。しかし、それをのりこえられたのは、「装い新たな理論構築」にいとまかった著者、森本教授の力量に負う所が大きかったようだ。その意味で、このサークルの文学教育論を「森本理論」と呼んでもいいかと思う。ところで、本書を読んで、私にいちばん興味ぶかかった所は、「登場人物」への新解釈のくだりであった。森本氏は、従来の「主人公」去々の語をとらない。それに代えて、本書では「登場人物」の三つのパターンが示されている。「第一類型——変革人物」

「第二類型——対立人物・理想人物」「第三類型——邪悪人物・ゆさぶり人物・強化人物」の三類型が、それである。

この類型化は、「作中に登場する諸人物が、作中を一貫してどのような役割を与えられて機能しているか」（三五頁）といった視点からなされている。一方、「文学教育の構造」を著者は、「作中の主要人物の自己変革——読み手の自己変革——未来行動の理念の獲得」（一七頁）と、じつに骨太い図式で示す。つまり、「登場人物」の「自己変革」の軌跡を、「読み手」（学習者）の変革に重ね合わせるべく意図され、文学作品を「登場人物」の「自己変革」の軌跡に沿って類型化していくことの意味も、そこにみいだせるといえる。この考え方は、文学教育の課題である「文学作品の構造」観、あるいは「主人公」論争などに、新たな角度からの波紋を投げかけてくれたことになる。その意味で、刺激的な一書といえよう。

ちなみに、本書には、「理論編」の他に「実践編」があり、そこには、「たぬきの糸車」（低学年）、「はまひるがおの小さな海」（中学年）、「大造じいさんとがん」（高学年）、「小さな出来事」（中学校）の四編の実践記録が収録されている。

（昭和52・7・20、黎明書房刊、A5判、二三九ページ。二二〇〇円）（足立悦男）